山とスポーツクライミング情報誌

登山月報

JMSCA

登山月報　第642号　令和４年９月15日発行
昭和45年12月12日第三種郵便物認可（毎月一回15日発行）

エベレスト南西壁のベルグシュルント

No.642

IFSC 世界ユース選手権（アメリカ・ダラス2022）報告 …… 2
第66回全国高等学校登山大会 報告 …… 5
第157回 Mountain World …… 6
Enjoy Climbing …… 7
熊本県山岳・ＳＣ連盟自然保護委員会のSDGsな活動 …… 8
令和４年度高等学校等指導者夏山研修会 報告 …… 9
第10回山岳遭難事故調査報告書 …… 10
JMSCA、表紙のことば、編集後記 …… 12

IFSC 世界ユース選手権（アメリカ・ダラス2022）報告

ユース日本代表ヘッドコーチ
西谷善子

2022年８月22日～８月31日にアメリカ・ダラスで世界ユース選手権が開催されました。民間のクライミングジムで行われるのは久し振りで、ボルダリング（Movement The Hill）とスピード・リード（Summit Plano）に会場が分かれて開催されました。日本は、スピード（16名）とボルダリング・リード（ＩＦＳＣ枠保有・追加選手も含む21名）の２チーム編成で選手を派遣しました。半分以上の選手が国際大会初出場という状況の中、選手全員が最高のパフォーマンスを発揮し、金５個、銀７個、銅７個、合計19個のメダルを獲得し、国別ランキングでは、ボルダリング・リード１位、スピード３位を獲得しました。

◎スピード

８月26日にユースＡ（2005－2006年生）・ジュニア（2003－2004年生）、27日にユースＢ（2007－2008年生）の競技が行われ、16名中15名の日本選手が決勝トーナメントに進出しました。ワールドカップにも参戦している選手たちがチームを牽引し、初参戦の選手たちにも良い刺激を与え、派遣選手の多くが自己ベストを更新しました（ユースＢの田渕と関川は、ＪＭＳＣＡスピード日本新記録を更新）。なかでも、表彰台に乗った３名は、粘り強い試合運びで勝ち抜き、藤野が優勝、上柿２位、竹内３位という日本のスピード界における初の快挙を成し遂げました。

＜藤野柊斗コメント＞

今回の大会は自分よりも速い選手がいて勝てるかどうか不安でしたが、自分のベストを出しきり優勝することができ、今までの努力が報われたと感じました！正直なところ自分が優勝できたことに一番驚いてます。これからも応援よろしくお願いします！

◎ボルダリング・リード

８月22日～25日にボルダリング、28～31日にリードの競技が行われました。ボルダリングから始まったこの大会は、８名の選手がメダルを獲得し、表彰台の約半数を日本が占める形となりました。そこからチームの快進撃が始まり、種目の垣根を越えて良い流れができ、最終種目のリードでも８個のメダルを獲得し、選手たちは躍進的な活躍を見せてくれました。特に、久米と安楽は、昨年に引き続きリードで優勝し、２連覇を達成しました。村下、関口、安楽、村越の４選手は、ボルダリング・リード両種目で表彰台に乗る快挙を成し遂げました。

＜村下善乙コメント＞

初めての世界ユースで緊張している部分もありましたが、ボルダー２位・リード優勝という結果を残すことがで

きて嬉しいです。また、日本チームが多くのメダルを獲得したことに刺激を受けるとともに、このような結果はコーチや監督、ＪＭＳＣＡスタッフの方々の多くのサポートや事前合宿・練習会のおかげだと感じました。ありがとうございました。今後も国際大会で活躍できるようにより一層努力していきたいと思います。

＜久米乃ノ華コメント＞

今年の目標だった世界ユース２連覇を達成出来たことが本当にうれしいです。多くの方々のサポートや言葉に助けられてとても良いメンタルで大会に臨むことができました。

成長を感じた部分も反省点も多くありますが、今回の経験を活かし、さらに高みを目指して頑張ります。これからの目標としては、ジャパンカップで日本代表になること、そして、来年こそワールドカップで活躍したいです。

＜安楽宙斗コメント＞

世界ユースに出て感じたことは雰囲気が日本と全く違ったということです。１種目目のボルダリングでは会場の雰囲気にのまれ、うまく実力を発揮できませんでした。次の目標は、２月に行われるボルダリング・リード日本選手権に向けて良い結果が出せるように日々の練習をがんばりたいです。

＜通谷律コメント＞

ボルダリングには自信がありましたが、初めての世界ユースで周りのレベルが分からないという不安もありました。そんな中で優勝できてとても嬉しかったです。次はボルダリングジャパンカップで決勝に進出して、ワールドカップに出場したいです。

さいごに

ボルダリング・リードについては、表彰台常連国のスロベニア、フランス、アメリカ、イギリスは変わらず強かったですが、これまでくすぶっていた韓国、チェコ、ブルガリアなどの決勝進出率が上がっており、次のオリンピックに向けて様々な国がユース世代の強化に力を入れている様子が窺えました。特にスピードについては、これまでの主要国以外の国の活躍が目立ち、その傾向を強く感じました。

日本においても、今年から強化選手制度を導入し、ユース選手のさらなる強化に取り組み始めています。国際大会で活躍してきた選手たちが次の選手へと良い形でバトンタッチしてくれていることで、全種目で良い流れが作れていることにも感謝です。年々選手たちの競技に対する向き合い方や意識が高まっていることを実感しています。今後も引き続き、強化選手→ユース日本代表→日本代表→オリンピックに繋がるように強化を図っていきますので、選手たちの活躍に期待してください。2022年の世界ユースは、アメリカで開催される予定です。

■スピード結果

カテゴリー		氏名	所属	成績
ジュニア	男子	藤野　柊斗	千葉商科大学付属高等学校	1位
		本明　優哉	岩手県山岳・スポーツクライミング協会	14位
		阿部　央彦	松山聖陵高等学校	15位
	女子	鈴木可菜美	千葉商科大学付属高等学校	11位
		相原麻菜美	愛媛県山岳・スポーツクライミング連盟	12位
ユースA	男子	谷井　和季	橿原学院高等学校	9位
		三田　歩夢	船橋市立船橋高等学校	12位
		真鍋　　竜	愛媛県立西条高等学校	18位
	女子	竹内　亜衣	千葉市立千葉高等学校	3位
		河上　史佳	鳥取県山岳・スポーツクライミング協会	14位
		林　かりん	鳥取県山岳・スポーツクライミング協会	欠場
ユースB	男子	上柿　銀大	岩手県山岳・スポーツクライミング協会	2位
		田渕　幹規	奈良県山岳連盟	5位
		三宅　祐希	岡山県山岳・スポーツクライミング連盟	13位
	女子	関川　愛音	八戸市立湊中学校	7位
		小屋松　恋	神奈川県山岳連盟	11位
		藤村　侃奈	奈良県立青翔中学校	16位

■ボルダリング・リード結果

カテゴリー		氏名	所属	成績	
				ボルダリング	リード
ジュニア	男子	村下　善乙	法政大学	2位	1位
		関口　準太	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	3位	2位
		上村　悠樹※	東京都立上野高等学校	－	4位
		鷹見　真洋	東京都山岳連盟	欠場	7位
	女子	久米乃ノ華※	日本大学	－	1位
		谷井　菜月	明治安田生命	8位	2位
		野部　七海	埼玉県立熊谷工業高等学校	5位	18位
		葛生　真白	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	13位	19位
ユースA	男子	安楽　宙斗	千葉県八千代高等学校	3位	1位
		通谷　　律	佐賀県山岳・スポーツクライミング連盟	1位	4位
		猪鼻　碧人※	聖望学園高等学校	－	3位
		小俣　史温	東京都山岳連盟	10位	5位
	女子	永嶋美智華	静岡県山岳・スポーツクライミング連盟	2位	9位
		竹内　亜衣	千葉市立千葉高等学校	4位	6位
		抜井　美緒	奈良県立香芝高等学校	16位	10位
ユースB	男子	石原　凛空	東京都山岳連盟	5位	2位
		寺川　　陽	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	3位	10位
		山田　航大	埼玉県立久喜北陽高等学校	4位	5位
	女子	小田　菜摘	大阪府山岳連盟	2位	17位
		村越　佳歩	茨城県山岳連盟	3位	3位
		関川　愛音	八戸市立湊中学校	9位	5位

※ＩＦＳＣ枠保有選手および追加選手のため、リード種目のみ参加

第66回全国高等学校登山大会 報告

令和４年度全国高等学校総合体育大会登山大会　第66回全国高等学校大会は８月５日(金)～９日(火)の日程で、香川県まんのう町を会場に全国から425名の選手・監督と100名を超える役員が参加して開催された。

主管する香川県では昨年度開催の福井県と同様に新型コロナウイルス感染症対策に留意し、会場地での宿泊をとりやめ近隣の市町での宿舎泊という前例のない対応を行った。選手・監督にとっても、運営にあたる競技役員にとっても初めてのことで、審査も含め様々な試行錯誤をしながらの大会となった。無事に大会を終えるためにはこの段階での詰めが肝心であり、それぞれの者が自分の担当するセクションで起こりうる様々な状況を想定して、対応策を講じた。

開会式前日の８月４日に大会参加者はまんのう町に集結し、諸会議など準備態勢を整えた。監督・リーダー会議では各都道府県からの参加者が一堂に会し、現状の中で安全を最優先に大会を開催するための必要事項について意思統一をはかった。

８月５日の開会式はいくつかのパーティーの座席が空席のままという一抹の寂しさを漂わせるものであった。もちろん口にせずとも皆が状況を理解しており、なんとしてもこれ以上の感染拡大を防ぎ、参加できなかった仲間たちに思いを馳せながら審査へと進んでいった。

８月６日は大会中屈指の長丁場となる笠形山を縦走するコースで、気温上昇による体調への影響が懸念された。宿舎泊やそれに伴う輸送の混乱もあり、女子Ｂ隊を先発させ男子Ａ隊を後続させるという変更を急遽実施することになった。幸いにコースの大半が樹林帯で日射が遮られており、心配された熱中症症状もなく各隊は無事にゴールした。

８月７日は香川県最高峰の竜王山を巡るコースで、道の駅ことなみから所定の行動を開始した。スタート直後にＡ隊で行動離脱が発生し、その救急対応でＢ隊の出発を遅らせる波乱含みのスタートとなった。その後気温の上昇とともに発生した激しい降雨がＢ隊を直撃し、遠方

の雷鳴も相まって行動を停止するパーティーが続出するなど、絶好の展望が期待できる竜王山コースとしては残念な状況となった。

８月８日は気象状況も安定し、香川県第二の標高を誇る大川山からの展望を楽しみ、監督も合流するパーティー行動を実施した。大会運営の関係上、インターハイでは選手と監督が一緒に歩く機会がなかなか持てない現状の中で、最後の思い出作りができる山行となった。

８月９日の閉会式には楽し気な笑顔が集結し、健闘したパーティーが晴れの表彰を受けた。大会を無事に終えた安堵感と喜びの中、閉幕を告げる緞帳が降りはじめるや満場の拍手と感動のなか選手たちの目にうっすらと光るものが見えた。

野外活動である登山は、気象条件その他の影響を直接にこうむる宿命にある。そんな中で天の時、地の利、人の輪が相まって無事に大会を終えることができたことはひとえに香川県、まんのう町をはじめとする地元の方々、そして四国地区のご尽力の賜物である。改めて御礼を申し上げたい。そして地元での予選を勝ち抜き全国大会に出場する栄誉を得ながら、感染症拡大防止のため出場辞退、棄権を余儀なくされた仲間たちへ思いをはせ、安心して登山ができる世の中を取り戻すことを祈念して今大会の報告とする。

第157回 Mountain World

K2は第2のエヴェレストになった？

池田常道

強力なシェルパをそろえたネパール公募隊がK２登山に進出するようになってからまだ数年、世界第２の高峰もいまやエヴェレスト同様、シェルパとクライアントの集団に席巻されるかたちとなった。

今季は出だしこそルート上部の深い雪に悩まされたが、７月21日午後10時45分、５人のシェルパが先陣を切って頂上に立ち、C４で待機していたクライアントたちにゴーサインを出した。この５人は８Kエクスペディションのパスダワ・シェルパとチリン・ナムギャル、マディソン・マウンテニアリング（米）のシディ・ギシン、ドルジ・ギャルツェン・シェルパ、リンジ・シェルパだった。

これを受けて、翌日からクライアントたちも登頂行動に移った。正確ではないが、その数およそ200名という。そのうち何名が頂上に立ったのかはまだ確認されていない。なお、無酸素で登頂したのは、台湾のグレース・ツェンとアンドラのステフィ・トロケ、２人の女性だけのようだ。両者とも、お付きのシェルパは酸素を使用している。

このほかブロード・ピーク、ガッシャブルムⅡ峰、ナンガ・パルバットに例年どおり多くの登山隊が殺到しているが、本稿ではそれよりも、小人数で新しい課題に挑んだ、アルピニズム本来のかたちを護ったチームを取り上げる。

プマリ・チッシュ東峰（6850m）　フランスのクリストフ・オジエ、ヴィクトル・ソーセド、ジェローム・サリヴァン（米国出身でシャモニ在住）が６月25日～29日に南壁をダイレクトに登って初登頂した。

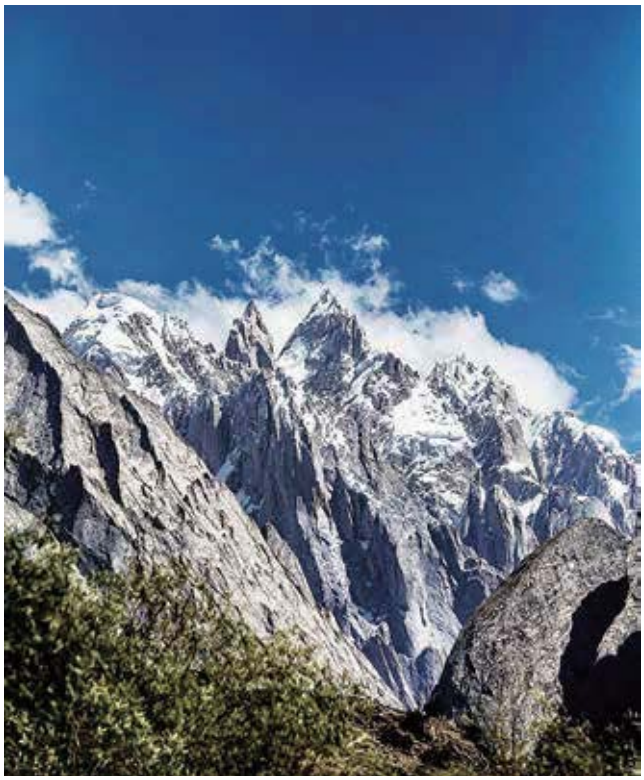
月末を迎えるまで不順な天候下で順応行動していたが、好転の予報を得て攻撃。最も可能性のありそうなラインは上部から雪のブロック崩壊を受けそうなので、急峻なピラーにラインを採ることを余儀なくされた。気温の低い午前２時に取付き、３日間で20ピッチ余を克服、最後の肩に出る部分は持参したロックシューズに履き替えて６ｂのセクションを突破。そこでビバークした後残る250ｍを登って頂上に出た。ルート名はThe Cristal Ship（1600ｍ M7 6b A2）。

K７中央峰（6858m）　2020年、K６中央峰に初登頂しているジェフとプリティのライト夫妻（米）が未踏のK７中央峰に挑んだ。６月20日、チャラクサ氷河の4360ｍにＢＣを設け、北壁から東壁を経由して初登頂を狙った。しかし、急峻なヘッドウォールの濡れたスラブを登山靴でたどっていたクラックが途中で消滅。リードしていたジェフは２回のフォールを喫し、100ｍを残して初登頂のチャンスを逃がした。

下降路は、これまでだれもたどったことがない中央クーロワールに採った。上部のセラックやクレバスに脅かされている2000ｍのクーロワールを１日で下り、無事氷河に降り立ったという。引き返し地点までのルートは、2000ｍ AI4+ M5 5.9 C2。

ウリ・ビアホ・スパイアー（5620m）　ウリ・ビアホ・タワーに隣接する小岩峰。イタリアのフランチェスコ・ラッティ、アレッサンドロ・バウ、レオナルド・ゲザが７月最終週に新ルートを拓いた。７月17～18日のトライでオフウィドゥスに対する用具の不足で中断後21日～23日で完登。Refrigerator Off Width（510ｍ 7a a2 M5）と命名した。

トランゴ・ネームレスタワー（6239m）　2009年にトーマスとアレクサンダーのフーバー兄弟がフリー初登した故ヴヴォルフガング・ギュリッヒの遺作。７月19日にスペインのエドゥ・マリンがフリー第２登。南チロルのヤーコポ・ラルヒャーとバルバラ・ツァンガールも第３登を果たした。



K7中央峰（写真中央の針峰）　右がK7主峰、左が西峰
ジョナサン・グリフィス撮影

Enjoy Climbing

連載⑤　ヒマラヤの沢(2)

2022.3.31-4.16 Jumula~Mugu~Humla
ヒマラヤの沢の可能性を探る旅

佐藤裕介

今回前半の狙いはネパール最大の湖、ララ湖を沢から目指す旅。今回は３ヶ所の入域許可を得ている。岩崎さんが懇意にしているガイド（ハスタ）とポーター１名が同行した。私達が沢に入る際ガイドたちはトレッキング道から行きどこかで待ち合わせると言う方法で進んでいった。沢に入る距離は長くないので宿泊は一緒にすることがほとんどである。軽い荷物でお気軽トレッキング風に進んでいくことが多く、こんなに楽チンで良いのかなと思うほど。また、今回の山行は予想以上周囲に民家が多くなっていて宿泊はほとんどが民泊となった。夕食もそこで頼んだ。朝食は無しで10時頃に民家があればお茶を貰ってブランチもお願いする流れが多かった。まともにトレッキングしたことはなかったが、トレッキングって楽しいんだなと今回初めて知ったのでした。

4月5日　7：00 シンジャ（2500 m）－コル(3300 m)－18：30 ララ湖下流本流出合付近の村(2500 m)

夜やっとのことで長距離移動を終えてスタート地点に着いたばかり。明日はゆっくり出発でいいね。という言葉を受けて「7時起き8時出発ですかねえ」と岩崎さんに言うと流石にそれじゃあ遅いだろうと、結局6時起き7時出発。どの辺がゆっくりなのか聞きたい。

ララ湖に続く本流に向かうべくまずは山越え。谷を登りコルを乗越してから反対側の沢を下降して本流に入る予定だ。予想以上にジープ道が上部に続いており、道路工事も着々と進行している。今回たどったラインは下部のみ車道だったが方面を変えてコルを目指せば車でコルを越えることも可能であった。遠目にジープが走っているのを見るのは少々興醒め感あったが、実際私達が辿ったラインはのどかな山村が続いていて気持ちよくトレッキングができた。コルを越え、沢に向けて下降開始。途中からガイド、ポーターと別れ、沢装備で沢を下降した。薄い板状に割れる岩が順層に積み重なっていてそれほど歩きにくくはない。途中から側壁は石灰岩の様相が強くなり傾斜の強くない沢であるものの、所々見下ろす傾斜の強い部分では巻きにくい形状だ。少し不安にさせる場面が何度かありせめてロープくらいは持ってくるべきだった。 実際は最後以外、大した滝は出てこず順調に下降した。あと500 mで傾斜の緩い平沢に合流と言う所で巻きにくい10 m滝が現れる。ロープ無しで来てしまったので無理せずに沢から離れた。少し手前の踏み跡から尾根に入り村人が使っている道から平沢に降り、本流目指してさらに下る。意外と時間がかかり、いきなり残業。暗くなった頃、民家にたどり着き、一夜の宿をお願いする。美味しいダルバートをいただきお酒も進んだ。

沢からララ湖へ

4月6日　6:30 村(2500 m) ― 14:00 ララ湖(3000 m) ― 19：00 村(2400 m)

早朝から宿を出てトレッキング道を進むが、完全に二日酔いで気持ちが悪い。連日の様に飲んでいて肝臓が疲れてるのかなあ。歩きながら岩崎さんに今日は飲まない宣言。

沢に入ってジャブジャブ歩くとだんだんと酒が抜けてきて快調になった。トレッキング道が沢の割りとすぐそばを通ることもあり、村人が「何してんだ？」と呆れ顔で見てるという中々シュールな風景だった。昨日と違って湖から流れる本流は冷たく今回地下足袋とわらじスタイル（ネオプレーンなし）ではかなり辛い。昼前に沢がゴミで汚くなって来たのでトレッキング道に上がってしばらく行くとお茶屋がありそこでお茶＆ブランチ。お茶屋以降は綺麗な渓相に戻ったのでララ湖直前から再度沢に戻ってララ湖まで辿った。ネパール最大の湖らしく対岸が霞んで見えるほどである。ここを半周してからこの周辺で一番大きな村ガムガディ目指して下る。ここからも予想以上に長くガムガディ手前の村で暗くなった。今日も12時間越えのハードなトレッキングだった。

4月7日　村～ガムガディ２時間程度

短い行程でガムガディ着。超長時間のバス移動につづき12時間行動が２日も続いたので、今日は半分レスト。ガムガディの宿でゆっくりする。

熊本県山岳・SC連盟自然保護委員会のSDGsな活動

霧の色ひときは黒し かの空にありて煙るか 阿蘇の頂

与謝野鉄幹

多くの文学者にも詠まれている阿蘇は、「火の国」熊本のシンボルとして親しまれています。4回の大噴火を経て形成された巨大カルデラの中に8万人が暮らし鉄道も走っているのです。麓の熊本平野の地下水・湧水は名水として知られ、上水道の100％を賄っており、蛇口を捻ればミネラルウォーターが飲めるといわれるほどおいしい水です。九州脊梁山地には特別天然記念物ニホンカモシカなどが生息し、森林生物遺伝子保存林のブナやミズナラが生い繁っています。コニャック、スコッチのように生産地名を冠することを日本で最初に許可された酒類を産する清流球磨川の人吉盆地。近年までサンゴ礁の世界の北限とされていた「日本の宝島」天草の海と山。熊本は、身の回りすべてがSDGs「15陸の豊かさも守ろう」の対象です。本県山岳・ＳＣ連盟の自然保護委員会も、この熊本の豊かな自然を守る活動を積極的に先導していかなければなりません。

最近の定期的な活動は、①県民体育祭登山競技のコースの整備、②石造アーチ橋通潤橋の清掃、③阿蘇山系の登山道の点検・整備、④傘下団体による登山道の整備と市民登山大会の主催があります。あらましは次のとおりです。

①県民体育祭は毎年9月に県内10地区をローテーションで会場とし、今年で77回を迎える県の恒例行事です。公開競技を含め30種目ほどで競い、登山は踏査競技を行っています。成年男・女の部に加え、高校の新人大会を同時開催しており、コースを選定し、3ヶ月前から入念に整備をします。毎年会場を変えるため、県内の多くの登山道が綺麗になります。②江戸時代嘉永年間につくられた県央・山都町の国指定重要文化財「通潤橋」は、高さが20ｍの石橋です。毎年8月にその側面を這って石積みの隙間から生えた草木の除去や草刈り作業を行っています。③阿蘇・くじゅう国立公園内にある阿蘇山系の山々の登山道の点検・整備は、年に3～4回、県阿蘇振興局遭難事故防止対策協議会と共同で実施しています。ミヤマキリシマの盗掘防止を兼ねたパトロールも行っています。④その他、傘下団体の「八代 山の会」は八代の竜峰山登山道の整備と維持・管理を年間を通して行い、毎年、市民登山大会を主催しています。さらに、不定期の活動ですが、傘下団体は各地元の登山道の整備・点検を活動の一つとしています。一昨年12月には「あそ望 山の会」によって、九州北部豪雨の被害で閉鎖されていた矢護山登山道が整備され、登山道の復活が叶いました。

2021年 通潤橋清掃

本県の活動は他県に比べ、組織的に大規模には取り組めていません。啓発活動にも力を入れ、県民全体を巻き込んだ活動にして行くことが今後の課題です。

登山道整備

ロープの設置

竹藪刈り

令和４年度高等学校等指導者夏山研修会 報告

７月25日（月）～27日（水）　国立登山研修所・立山室堂周辺

この研修会は、高等学校等で登山指導・引率などを行っている先生を中心に毎年行っており今年度で５年目となります。

初日の机上では、登山からは消せない不確実性／リスクへの対応などを学び、グループに分かれて山行計画（Plan）を作成、二日目からは行動（Ｄｏ）に移り、ポイント・ポイントでの確認（Check）し判断・先読み、そして講師陣がアドバイスを行い、修正（Act）のヒントから自分たちで判断してもらうと言うサイクルで行いました。

この一連の流れがＰＤＣＡ（計画－実行－評価－改善）サイクル、安全登山の基本と言えましょう。

私が担当したグループは、雷鳥沢キャンプ場から一の越・雄山・大汝山・真砂岳を経由する計画を立てましたが、残雪の残る沢の渡渉や雪渓トラバースなど様々なリスクを考え、要所・要所でのタイムチェック、メンバー管理などを行い行動しました。

当日は雷注意報も出ていたのですが、積雲の発達も弱いと判断し行動を続け予定通りの帰着時間に雷鳥沢キャンプ場へ戻りました。

この一の越から雄山ルートでは、小学生の学校登山グループと出会い、弱者に付く引率者の目配り気配り、ガイドされながら救助隊に降ろされる方などと遭遇し、きっと何かを学べているものと思います。

そして最終日は雪渓での最小限のカラビナ・スリングを使い、アンカー設置方法などのロープワーク、そして夏山の残雪処理方法を学び三日間を終了しました。

この国立登山研修所の研修会は講師陣も含め内容がとても充実しております。

多くの高等学校関係者が参加され、素晴らしい山の魅力を高校生たちに伝え出来る“良き指導者”となり、安全登山へ高校生を導いてほしいと願います。

（指導委員会　本郷利夫）

息を吹き返しだした登山活動

1．コロナの影響を受け続ける登山活動

30年間山岳遭難事故を統計分析すると、登山事故者の目的、態様、発生場所などが、一定の比率（登山事故発生の規則性）で発生していることに気がつく。事故者数が増減しても比率は、それ程変わらない。そのため、次年度の各事故要因項目ごとの予測値も、そう大きくは外れなかった。

ところが、コロナの影響により、その規則性は全国規模で崩れてしまった。2020年は多くの登山県での事故者数が減少する一方、都市周辺の山域で事故者数が急増した。登山形態も近場、都市近郊の山域でハイキングなどの軽登山による事故が増えた。

しかし、2021年になると、コロナの陽性者数は第４波～６波と大きく増大したにもかかわらず、第３波までの登山活動そのものの停止からコロナと共存した登山形態に移行していった。

その結果、後述する警察事故統計（2021）が物語るように、登山事故者数は再び増加に転じている。典型的な事例が長野県で、事故件数は2019（265件）、2020（183件）、2021（257件）と数値的には元の状態に戻っている。

2．以前の登山形態に戻ったのか

では、以前からの登山形態に戻ったのか？

その回答は「No」である。

事故を起こした登山者の目的をコロナ以前と比べると、軽登山であるハイキング目的が増加する反面、観光目的での登山は減少している。マスクをして登山する以上、従来とは異なる登山活動状況下で事故が発生していると解釈すべきであろう。

コロナの影響がなくならない限り、このような登山傾向は継続され、安全登山への対応が不十分な近場山域で事故が発生するリスクが高い。

2022年現在、コロナの登山活動への影響は以前より少なくなったが、第７波は、猛烈な発生数となってきた、今後とも、慎重に遭難事故の発生状況を見守っていく必要がある。

「何故、世界一道迷い遭難が多いのか」、見えてきた原因

1．減遭難運動と道迷い

ＪＭＳＣＡ遭難対策委員会では、「Stop the 1000」のスローガンの元に、全国規模での遭難事故減少運動（減遭難と呼称）に取り組んできた。

特に、事故態様（原因）の半数弱（毎年千人を超える）を占める「道迷い」は、最も活動成果が得やすいとして、主たるターゲットとしてきた。当委員会では、全国に３モデル地区（大阪府金剛山系、兵庫県六項山系、奥多摩山系）を設定し、減遭難活動のノウハウを蓄積してきた。

その特徴と手順は、先ず、対象地区における事故発生状況（発生場所、事故態様、事故者の基礎情報など）を数量的に把握する。その後、事故の発生しやすい場所を特定し、案内板やテープによる簡易道標を設置する事で、事故の発生数を具体的に減らす点にある。

2．見えてきた道迷いの原因

この減遭難活動において、重要な作業過程に事故の発生場所と状況を表す事故マップの作成がある。有用性を示す典型的な事例を図１に示す。図は、裏六甲地区で、道迷い事故が集中的に発生してきた瑞宝寺谷である。道迷い発生場所が登山道から離れた場所に集中しているのが分かる。

その原因を地元関係者で検討すると、台風後、登山道が荒れ、自然発生的に新たな巻き道ができ、そこで道迷いしている事が分かった。この地域を、ヤマレコによる登山者の通過記録で追うと図２（緑色の巻き道）が得られる。確かに、巻き道で道迷いが発生しており、通過記録と登山道との関係を求めることで、道迷い発生地点を推測できることが分かった。　その後、分析結果を参考に、兵庫県警ら地元関係者と図３の案内板を取り付けた。

このヤマレコの通過記録は、全山域での登山者の動きが残されているため、国土地理院発行の地形図に記載された登山道を利用しているケースと踏み分け道を利用し

ているケースに明確に仕分けすることができる。

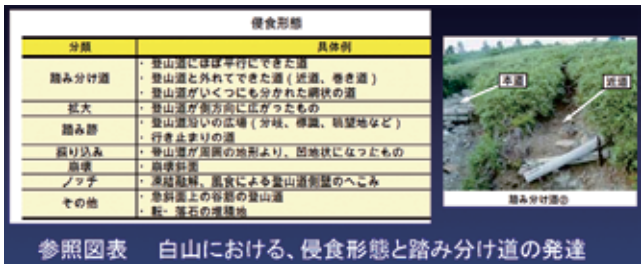
そこで、裏六甲全体で、紺色線で踏み分け道を示したのが、図４である。想像以上の長さと数の踏み分け道が複雑に発達していることが分かる。この傾向は図５の金剛山においても、また、他の山域においても、同様に見られる事が分かった。

国際山岳連盟ＵＩＡＡの登山部会では、「何故、日本で道迷い遭難数が突出しているのか」、「日本の登山は特殊なのか」長い間、議論されてきたが、明確な解答は得られなかった。やっと、その解答が、「膨大な数の踏み分け道の存在に起因する」と言う解決の糸口が見つかったと感じている。

３．今後の対策と減遭難活動

金剛山、六甲山に見られる踏み分け道は予想より遙かに大きく広がっていた。他の山域も同様である。　この対策として、減遭難の方向からの運動だけで対応するには限界がある。

これだけ踏み分け道ができると言うことは、山の環境に侵食により重大な影響を与えていると考えられる。白山自然保護センターの研究によれば、白山で、登山道から大規模な侵食が発生し（参照図表）、その原因に、登山者のオーバーユースが報告されている。



侵食形態

分類	具体例
踏み分け道	・登山道にほぼ平行にできた道 ・登山道と外れてできた道（近道、巻き道） ・登山道がいくつにも分かれた網状の道
拡大	・登山道が側方向に広がったもの
踏み跡	・登山道脇の広場（分岐、標識、眺望地など） ・行き止まりの道
掘り込み	・登山道が周囲の地形より、凹地状になったもの
崩壊	・崩壊斜面
ノッチ	・凍結破砕、風食による登山道側壁のへこみ
その他	・急斜面上の谷筋の登山道 ・転、落石の堆積地

参照図表　白山における、侵食形態と踏み分け道の発達

そこで、欧米に見られるような登山道の自然保護活動と抱き合わせ活動することで、より広範囲に減遭難運動を展開することを提案したい。

山岳団体（JMSCA、労山）の組織情報と事故調査

１．ＪＭＳＣＡ・労山にみる会員数と事故発生状況（2003 ― 2021）

２つの山岳団体の事故の発生状況を経年的に見ると図６が得られる。2003年より事故の発生傾向は2015年付近まで右肩上がりに増加し続ける。これは、会員の増加による母集団の拡大によるものであろうか、その後、会員数が減少に転じると、一定あるいは減少しだす。

ただし、2020 ― 2021年間で200人ほど事故者が減少している。会員数減少によるものか、コロナの影響のためか、分からない。　なお、死亡者数は、経年的に見てバラツキがあるものの低くなってきている。

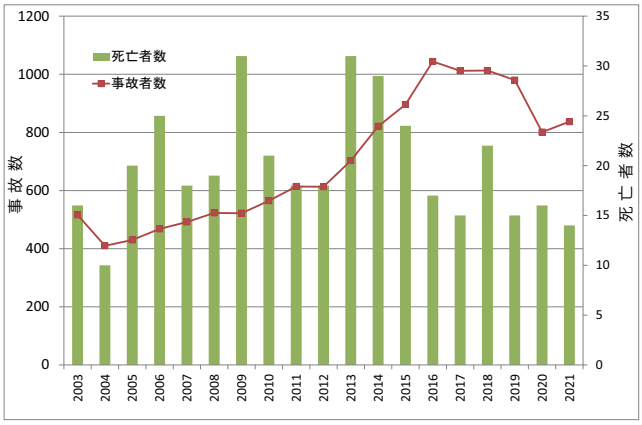


図６　労山とＪＭＳＣＡの事故・死亡者数

2．ＪＭＳＣＡ・労山会員の減少傾向

ＪＭＳＣＡ・労山ともに会員数減少傾向に歯止めがきかない（表１）。

特に、ＪＭＳＣＡでは、コロナの影響もあり、登山団塊世代で、減少が著しい。

その背景をレジャー白書（2021）で探ると、国民の「支出のゆとり感」は、調査を初めて過去最低となった。余暇指数が増えたとする人の割合から減った人の割合を引いた値を「支出面でのゆとり感指数」とすると、（男－20．９、女－38．３）　世代別では女性の60代、70代の指数が　－50を下回っている。このような背景も関係しているのかもしれない。

2003～2020	年度	会員数	事故者数	死亡者数	アンケート回答数	回収率(%)	対会員事故比 1:x	対会員死亡比 1:x	死亡／事故者(%)
日山協、労山、都岳連共催	2003	59429	528	23	199	37.7	112	2584	4.4
日山協、労山、都岳連共催	2004	65238	420	11	169	40.2	155	5931	2.6
日山協、労山、都岳連共催	2005	68430	446	28	96	21.5	153	2444	6.3
日山協、労山、都岳連共催	2006	70417	479	31	230	48.0	147	2272	6.5
日山協、労山、都岳連共催	2007	73449	516	24	227	44.0	142	3060	4.7
日山協、労山、JRO	2008	73668	527	22	218	41.3	139	3349	4.2
日山協、労山、JRO	2009	79390	530	37	179	29.4	149	2146	7.0
日山協、労山、JRO	2010	85454	574	24	188	34.1	148	3561	4.2
日山協、労山、JRO	2011	89751	629	21	190	34.1	142	4274	3.3
日山協、労山	2012	74405	613	18	214	34.9	121	4134	2.9
日山協、労山	2013	74835	703	31	220	31.3	106	2414	4.4
日山協、労山、JRO	2014	110516	850	38	221	26.0	130	2908	4.5
日山協、労山、JRO	2015	130611	940	37	247	26.3	138	3517	3.9
日山協、労山、JRO	2016	138960	1090	30	228	20.9	127	4632	2.8
日山協、労山、JRO	2017	148153	1077	37	382	35.5	137	4004	3.4
日山協、労山、JRO	2018	156601	1077	42	315	29.2	145	3729	3.9
日山協、労山、JRO	2019	163419	1038	30	251	24.2	157	5447	2.9
日山協、労山	2020	62991	801	16	239	29.8	79	3937	2.0
日山協、労山	2021	60585	837	14	229	27.4	72	4328	1.7

表１　ＪＭＳＣＡ，労山など、会員数、事故者数の経年変化

次号へ続く

JMSCA

令和４年度 第５回 ハイブリッド理事会議事録

○**日　時**：令和４ 年 ７月14日（木）
14：10～16：50
○**場　所**：ＪＳＰＳビル３Ｆ会議室No.1とＷｅｂのハイブリッド会議
○**出席者**：丸会長、亀山、小日向各副会長、小野寺専務理事、相良、古賀、蛭田、村岡、濱田、赤尾各常務理事、町田、原、前田、山本、野村、栗田, 笹生、小竹、水島、水村、山口、六角、青山、小高、望月、丸山、中橋各理事、中畠、古屋、佐久間各監事
○**欠席者**　安井理事

１．開　会

２．丸会長挨拶

今後10, 11月からインターハイを含め忙しくなるなかで、ＢＡ．５の感染力の強いコロナが再燃し、大会延期や中止の懸念や、コーチ、選手の皆さん、山小屋経営に携わる方々にも、いろいろ支障が出はじめてきています。この難局を何とか乗り切って、無事故で行きたいと思いますので、ぜひよろしくお願いします。

３．会議成立状況報告

理事数 28名中27名出席、監事数 ３名中３名出席（定款第 33 条、定足数＝15 名（１／２ 以上））

４．議長選出

亀山副会長が議長を務める。
（定款第32条）

５．議事録署名人

会長及び監事（定款第34条）
ホストは小野寺専務理事が務める。

６．議　題

議案第１号　議事録の承認について

令和４年度第３回、第４回理事会議事録の承認について（事前送付済）

議案第２号　役員の担務について

亀山副会長から、新理事を含め以下の担務の提案があった。
古賀常務理事を副会長に推挙する。
町田理事を登山部長に推挙する。
小高理事：登山部、自然保護委員会
望月理事：登山部
丸山理事：登山部、山岳スキー
中橋理事：ＳＣ部
新登山部長町田理事について、業務執行理事／常務理事としたほうが良いのではないかという提案があった。その理由として、（１）業務について責任を持っていただくこと（２）組織管理運営規程から、専門部の主管理事は、業務執行理事／常務理事の中から選ぶことになっているという２つがあげられる。

さらに、丸会長から、亀山副会長及び新副会長については、３つ（ＳＣ部、登山部、山岳スキー委員会）の業務を平行してバランスよく担当していただきたいとの提案があった。

上記の提案に対して採決を行い以下の通り承認された。

古賀副会長について
反対ゼロ　棄権ゼロ　賛成26名

町田常務理事・登山部長について
反対ゼロ　棄権ゼロ　賛成26名

なお、新理事の詳細担務については、各部会ごとの協議を経たうえで決定され、次回理事会で発表されることになった。

議案第３号　正会員の承認について

配布資料を基に、小野寺専務理事から、以下の正会員の変更の説明がされ、異議なく承認された。

- 宮城県山岳連盟 吉田弘司氏　退会、村上美智子氏　入会
- 大阪府山岳連盟 飛田典男氏　退会、小畑和人氏　入会
- 鳥取県山岳・スポーツクライミング協会 大西一俊氏　退会、小坂秀己氏　入会

議案第４号　参与の推薦について

山梨県山岳連盟　顧問　秋山泉氏
異議なく承認された。

議案第５号　賛助会員の承認について

北海道山岳連盟　名誉会長　小野倫夫氏
異議なく承認された。

議案第６号　雪崩災害防止功労者について

小野寺専務理事から配布資料を基に、国交省からの推薦依頼が来ている旨の説明があった。登山部で検討していただき、もし候補者があれば、小野寺専務理事あてに連絡することになった。

議案第７号　海外登山奨励金の交付について

小野寺専務理事から、３隊候補があがっているが、結論が出ていない。８月に結果を報告するとの説明があった。

議案第８号　山岳スキー強化選手、海外派遣選手選考規程について

配布資料を基に笹生理事が説明した。

質問　アスリートの意見は聞いているか、異論がでる余地はないか。

回答　選手から異論は出ないと考えている。また、オリンピック競技（スプリント）だけでなく、ほかの競技でも結果を出せそうな選手を選ぶようにしている。ガバナンス委員会として、内容については、公平性、客観性があり、問題なしと判断している。

意見　配布資料の中で、”規程　規定“や、数値の後のスペースが有ったり、無かったりで、体裁が整っていないので、細かい部分を整えたほうがよい。当文書の体裁を整え、事務局でも最終チェックを行うということを条件としたうえで, 当規程の採決に入り、承認された。

議案第９号　ＪＭＳＣＡスポーツクライミング強化センター設置事業実施要項について

小野寺専務理事から、配布資料をもとに説明がされた。作成の背景は、前回、佐賀県から依頼があったのがきっかけで、内容はＪＯＣの実施要項を下敷きにしている。

質問　今後適用されそうな場所はどうか。認定料金をいただくこと、10万円と入れていることについて、どう考えるか。

回答　栃木、三重、愛知、千葉が候補となる。ＪＯＣの実施要項では、ロゴや、看板など目に見えるものを出すことになっている。

質問　標題が文章内容を表していないようである。設置するのは自治体で、認定するのがＪＭＳＣＡならば、それがわかるようにしたほうがよいのではないか。

回答　標題と文章内容を含めて変更、見直していく。金額を入れることも含め、出し直したい。文書内容については、望月理事にも見ていただき、次回承認を得られるように、ご協力をお願いしたい。

議案第10号　オフィス改造具体的計画について

配布資料をもとに、赤尾事務局長から、３社の入札と評価を行った結果、オフィス家具業者としてプラス株式会社を選定した根拠、理由と、８月20, 21日に事務所改造を予定していることの説明がなされた。

質問　現行打合わせスペースは、ユニ

フォームやテキストなどが蔵置されていて手狭だがどうなるのか。内閣府の立入検査を、同じ場所で行うのであれば、できるだけ見栄えをよくしておいたほうが良いのではないか。

回答　打合せスペースはそのまま残し、事務所になくてもよいものは外部倉庫に移動する予定。結果的に、4（固定席）＋14（フリースペース座席）＝18席確保可能である。（添付“事務所レイアウト”を参照）

質問　もともとの予算と比較して、今回の入札でどのくらい違うのか。

回答　３月の提案時の初期予算では620万円だったが、今回の入札で総額530万円くらいとなり、100万円弱低くなる見込み。この中には、廃棄費用や、ＩＴ環境設置費用がはいっている。

質問　テキストや資料など、事務所で作業に使うものがあるがそれらはどうなるか。また、Note PCを持ち込んで作業する場所はあるか。

回答　すぐ使用するものは事務所に蔵置し、補充用テキストや資料などは外部倉庫に保管する予定。ＰＣ持ち込みの作業は、フリースペース座席を使用していただく。

上記質疑応答の後、採決を行い以下のように承認された。

反対ゼロ　棄権ゼロ　賛成26名

７．報　告

報告第１号　６月度会計経過報告

配布資料を基に相良常務理事から説明がされた。

報告第２号「坂口顧問を偲ぶ会」について

小野寺専務理事から、配布資料を基に、先般逝去された当協会元会長坂口顧問を偲ぶ会を８月27日を予定しており、本日案内状送付予定の旨説明がされた。

報告第３号　専門委員会常任委員について

配布資料の通り、常務理事会で承認された。

報告第４号　全山遭第１回幹事会議事録について

配布資料に記載の通りである。

報告第５号　全国遭対委員長会議議事録について

配布資料に記載の通りである。

報告第６号　自然保護委員会事業計画について

配布資料に記載の通りである。

報告第７号　ＪＯＣ強化拠点について

小野寺専務理事から、３，４年前に、愛媛、鳥取を申請して強化拠点となったが、令和４年分は現在申請中で許可はまだされていない、今後エンブレムも変わる予定との説明があった。

報告第８号　公認大会について(報告なし)

報告第９号　山岳コーチ、主任検定員

小野寺専務理事から常務理事会で配布資料の対象者が承認された旨の報告がされた。

報告第10号　山岳レスキュー講習会について

配布資料に基づいて原理事から説明がされた。

報告第11号　キャッシュフローについて

濱田常務理事から配布済資料（６月30日時点）を基に現況の説明がされ、10月末にキャッシュが枯渇すること、そのため、この時期に、ＪＯＣ前払いの手続きを取ったほうが良いのではないかとの説明があった。

報告第12号　ＢＹＣ大会の報告について

村岡常務理事から、配布資料に基づき、ＢＹＣ大会について、全体として、約5000万円、鳥取県としては、約2800万円の経済効果があった旨の報告がされた。

報告第13号　強化委員会、選手の派遣について

配布資料の内容で常務理事会で承認されたので、各自読んでおくことになった。

報告第14号　国体規則の改定について

配布資料に基づいて西原国体委員長から説明がされ、常務理事会で承認されていることの報告があった。

８．協議事項

８－１　ガバンナンスコードによる役員の定年制について

小野寺専務理事から、ＪＳＰＯの改定文例が紹介された。

８－２　アルパインクライミング推進協議会との協働について

配布資料を基に、小野寺専務理事から、協議の提案がされ、以下のような意見が出された。

意見　ＪＭＳＣＡとしては、自然保護の法的ルールがあり、コンプライアンスの観点からどう考えるかの一定の見識（方針）を決めたほうが良いのではないか。

意見　当団体から参加の打診をされた。合法的に許可を得るための働きかけを一緒にしていただけないかと依頼された。応援しても、よいのではないかと思います。

意見　環境省から、違法だと言われたらどう対応するつもりか。

意見　ＪＭＳＣＡの名前だけ貸すというのはよくない。決定プロセスに加わり見解をまとめるのに加わるべきではないか。

意見　国際アルパインクライミング委員会や、ＳＣ普及委員会が、本来の役割担当ではという意見もあるが、解決案の策定まではむずかしい。

意見　アクセス問題の解決の趣旨は賛成だが、役所相手なので、藪蛇になったり、最悪の場合には、登山道にも影響が出てしまう可能性がある。話を煮詰めないと問題があり、早急な解決はできない。

８－３　四国グレートトレースについて

丸会長から、配布資料に対して補足説明がされた。まだ、ドラフトのレベルなので、当内容は、登山普及委員会と登山部と協議して進めることとなった。

８－４　60周年記念寄付金残金の使途について

小野寺専務理事から、現在120万円強残っているが、会計士に照会した結果、前回理事会で決定した事務局の部屋の改造費としては、公益目的とみなされず使用できないこと、あくまで公益目的での限定使用でなければならないことの説明がされた。60周年と銘打って、何か事業をやったらどうかという意見も出された。

９．その他

９－１　盛岡市とＩＦＳＣで進めているワールドカップ大会の実行委員会が立ち上がり、岩手県山岳・スポーツクライミング協会の会長から、よろしくお願いしますとの話があった。

９－２　ＪＯＣの強化選手費用は、協会全体として、ＳＣ＋SKIMOで、800万円を申請している。

次回理事会は、８月10日（水）本日と同じ場所で開催の予定である。

令和４年７月14日
記録　赤尾　浩一

寄贈図書

Corean Alpine Club	「산（山）」2022年６月号 Vol.273号	雑　誌
(株) ネイチュアエンタープライズ	「岳人」８月号 No. 902、９月号 No. 903	雑　誌
(株) 日本運動具新報社	「スポーツ産業新報」第2367号、第2368号、第2369号、第2370号、第2371号	新　聞
(公財) 日本スポーツ協会	「Sport Japan 」Vol. 62	会　報
(公社) 日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.389	会　報
(株) 山と渓谷社	「山と渓谷」８月号 №1054、９月号 №1055	雑　誌
東京野歩路会	「山嶺」Vol.99 No.1109、No.1110	会　報
日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」第494号、第495号	会　報
(一財) 全国山の日協議会	「山行手帖」No.752、No.753	会　報
新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第360号	会　報
(公社) 日本山岳会	「山」2022年７月号 No. 926、８月号 No. 927	会　報
愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第445号	会　報
(公財) 健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No. 532	会　報
愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第445号	会　報
(株) イマジナ	「付加価値の意味」阿部 誠 著 プレジデント社	書　籍
(公社) 日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.390	会　報
(公財) 埼玉県スポーツ協会	「スポーツ埼玉」Vol.294	会　報
兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第662号	会　報
日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.571	会　報
三峰山岳会	「岩つばめ」No. 368	会　報
やまびこ山想会	「やまびこ第201号	会　報

8月号より開始！ かすみちゃんのハイキング日記」

表紙のことば

ウェスタン・クウムのＣ２（6,500ｍ）から小１時間氷化した雪原を辿り、南西壁の直下で南稜へのルートと分かれる。そこから南西壁を目指して登って行くと、南西壁基部の6,700ｍ付近に大きなベルグシュルントが口を開けている。ベルグシュルントは、ラダーの必要もなく、難なく越えられた。

ベルグシュルントの上からは、頭上の顕著な軍艦岩を目指してルートを延ばす。ベルグシュルントから８ピッチで軍艦岩の基部（6,900ｍ）に達する。初期の南西壁隊のＣ３である。我々はＣ３（7,600ｍ）を造るまでのテンポラリー・キャンプとした。

（写真撮影　尾形好雄）

編集後記

９月の上旬になり暑さのピークも過ぎて朝、夕では肌寒さも感じる季節になりました。

久しぶりに大学生８名コーチ３名の11名で涸沢から奥穂、前穂、岳沢に行ってきました。夏山と紅葉の間で比較的空いており涸沢のテント場も余裕でした。気温もちょうどよく一滴の雨にも降られず久しぶりのご褒美でした。学生たちの話を聞いていると話題がたぶんですがゲームの中の何かのようなんですが聞いたこともない言葉が次々と出てきてまったくわかりません。それをずっと話しているのです。そろそろ監督を変わろうと思います。　（蛭田伸一）

トレランJAPAN
一般財団法人 日本トレイルランニング協会
〒141-0031
品川区西五反田６-３-23-205
☎03-3492-0355　FAX 03-6451-3767

登山月報　第 642 号
定　価　110 円（送料別）
予約年間　1,300 円（送料共）
昭和 45 年 12 月 12 日
第三種郵便物認可
（毎月１回 15 日発行）
発行日　令和４年９月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町４番２号
Japan Sport Olympic Square 807
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03－5843－1631
ＦＡＸ　03－5843－1635

［山岳雑誌］ 山と人、時代をつなぐ　岳人

特別編集
秋山 2022
発売中
★モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて発売中！

毎月15日発売　価格 968円(税込)

年間購読がおすすめです
購読割引　送料無料　限定品プレゼント
年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。
通常価格12冊　~~10,560円(税抜)~~ 11,616円(税込)
→ 年間購読なら12冊　9,680円(税抜) 10,648円(税込)　1冊分おトク!

年間購読特典
わずか32g!※
岳人コンパクトマルチランプ
限定デザイン
さまざまなシーンで活躍する超軽量ヘッドランプ。
※単4形乾電池1本含む重量
全国2,000カ所以上でご優待！
岳人カード
全国の温泉や山小屋など提携施設でさまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから!
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中!
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

ＳＤＧｓで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs（Sustainable Development Goals）とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境

関連する主なSDGs	主な取組
12 13 14 15	・再生可能エネルギーの普及支援 ・自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング

安心して暮らせる社会

関連する主なSDGs	主な取組
1 2 3 4 5 6	・健康づくりの支援 ・先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応

活力のある経済活動

関連する主なSDGs	主な取組
7 8 9 10 11	・次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） ・災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会

JMSCA

登山者のマナー
山岳保険

あなたのは山岳保険ですか？

- □ 傷害死亡・後遺障害
- □ 遭難捜索費用
- □ 救援者費用
- □ 傷害入院
- □ 傷害通院
- □ 傷害手術
- □ 日常生活賠償

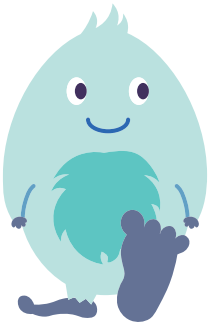
日山協 山岳共済会 〒170-0013東京都豊島区東池袋3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00（祝日除く）

携帯からも資料請求ができます。
https://sangakukyousai.jp



「MAMoL マモル」
山を愛する人たちの共済会を～

WEBからもお申込みいただけます